

## 「2025年の崖」の本質的な要因

三 谷 慶一郎

### 目 次

- |                |                     |
|----------------|---------------------|
| 1. 「2025年の崖」とは | 5. 増えないデジタル投資       |
| 2. 本質的な要因      | 6. 日本企業ができていない三つのこと |
| 3. DXの現在地      | 7. 対応すべき方策          |
| 4. 生成AIの活用状況   |                     |

「2025年の崖」とは「企業においてブラックボックス化した情報システム（レガシーシステム）が、DX推進の足かせになる」という現象である。レガシーシステムが生まれた背景には、多くの日本企業において「独自性の高い仕事のやり方」が行われており、業務プロセスやデータ名称が曖昧で標準化されていないという状況がある。このことが日本企業によくみられる「業務改革が進まない」「新しいビジネスが創り出せない」「柔軟な企業間連携ができない」などの状況を引き起こし、最終的にデジタル技術の活用が、十分な効果創出につながらないことに結びついている可能性がある。

### 1. 「2025年の崖」とは

経済産業省の「デジタルトランスフォーメーションに向けた研究会」が2018年に「DXレポート」という報告書をまとめた（経済産業省 [2018]）。この副題に添えられた「2025年の崖」という言葉のインパクトが当時大きな反響を呼んだ。

「2025年の崖」とは、企業における情報システムが事業部門ごとに構築されていて全社横断的な

データ活用ができなかったり、過剰なカスタマイズによって複雑化・老朽化・ブラックボックス化したりして、DX推進の大きな足かせになるという現象のことである。DXレポートでは、このようなシステムのことを「レガシーシステム」と呼んでいる。

情報システムがこのまま放置された場合、今後予想されるIT人材の引退やパッケージソフトのサポート終了などによるリスクの高まりに伴う経



三谷 慶一郎（みに けいいちろう）

NTTデータ経営研究所 主席研究員 エグゼクティブ・コンサルタント。筑波大学大学院ビジネス科学研究科修了 博士（経営学）。デジタル戦略やサービスデザインに関するコンサルティングを推進。武蔵野大学国際総合研究所客員教授。経済産業省などのDX政策関連検討会の委員も務めている。監訳書に『DX（デジタルトランスフォーメーション）経営戦略—成熟したデジタル組織をめざして—』（ジェラルド・C・ケインほか著、NTT出版、2020年）がある。